

エロゴルフ (2)

カジノ

春日信彦

自殺

タイ旅行中でのN大臣の自殺は世間をにぎわせていた。だが、自殺と判断するうえで全く疑問がなかったわけではなかった。どこにも遺書らしきものは発見されず、また、彼の日記には巨額の米国債購入に関する疑問点が記されていたが、特段自殺の原因とみられるような苦悶は、どこにも記されてなかったからだ。タイ警察も日本警察も他殺と断定するだけの判断材料を発見できなかったためか、最終的に、自殺と判断した。

皇帝KGBロイヤルホテルのベッドの上で発見されたN大臣の遺体の左胸にはアイスピックが突き刺さっていた。また、アイスピックに残された指紋は、彼のものだけであった。死亡推定時刻は、10月2日（月）の午前1時から午前2時。10月1日（日）彼と同室していたとみられるM氏の話によると、N大臣とM氏は午後8時ごろから午後11時ごろまでお酒を飲みかわし、11時過ぎにM氏は退室したとのこと。M氏の証言に裏付けはないが、M氏には、殺害動機もなく、N大臣と争った形跡もなかった。

沢富はこの自殺には、納得がいかなかった。ゴルフツアーでの自殺は、あまりにも不自然に感じた。どんなに我慢強く、不平不満を口にしなくとも、自殺を考えている人であれば、「俺は、もうだめだ。これでおしまいだ。俺は、失脚する」など細君や周りのものに何らかの絶望的不平を言っていたと思われる。ところが、特に悩んでいた様子もなく、自殺をほのめかすような言葉は全く聞かれなかったと細君は話している。

この事件は、自殺として処理されているため、これ以上考えても無駄と分かっていたが、沢富は、どう考えても他殺としか思えなかった。もし、他殺であれば、これこそ完全犯罪だと思えた。考えに行き詰まった沢富は、伊達の意見を聞いてみたくなった。2月3日（土）伊達のマンションにやってきた沢富は、いつものキッチンテーブルに腰掛け、伊達の意見に耳を傾けていた。

「まあ、サワの疑問もわからなくもないが、事情聴取を受けたM氏には、全く殺人動機はない。また、M氏が退出した後に誰かが侵入したと判断しうる物的証拠もない。だから、自殺と断定せざるを得ないんじゃないか。自殺心理というものは、他人にはわかりづらいもんだからな～。俺も、自殺だと思うがな」伊達は、お湯割りの焼酎を一口すすった。沢富は、腕組みをしてうなずいていたが、どうしても、自殺には思えなかった。

「確かに、他殺の物的証拠が出ない限り自殺で処理されるでしょう。もし、他殺であれば、完全犯罪です。仮にですよ、他殺だったとして、どうやって殺害したと思います。テーブルのボトルはほとんど空（から）になっていたわけでしょ。きっと、N大臣は泥酔して、爆睡していたと思われま。そんな彼に、アイスピックを突き刺すことは、いとも簡単なことですよ。でも、どうやって、侵入したかです？ドアは自動ロックだから、侵入できないはず。窓も、すべてロックされてました。ウ～～」

ナオコが沢富の唸（うな）り声を聞きつけて飛んでやってきた。「サワちゃん、おなかの具合でも悪いの。食あたりかしら、このマグロ、三日前のだから」顔をひきつらせた伊達が、叫んだ。「三日前のかよ。だろうな～～、変な触感がしたんだ。腐ってはいないと思うが、刺身で出すなよ。ほら、サワが唸ってるじゃないか」ナオコは、ヘタレ顔の沢富をじっと見つめた。

ナオコに見つめられた沢富は、誤解を与えたと思い、ニコッと笑顔を作った。「いや、お腹が痛くなったんじゃないです。このマグロ、おいしいですよ。まったく問題ありません」沢富は、横腹を左手でポンとたたいた。ほっとしたナオコは、沢富の空になったグラスにビールを注いだ。第三者のほうがいいヒントを出してくれそうに思えた沢富は、ナオコに疑問を聞いてもらうことにした。「さっき、唸っていたのは、完全犯罪の方法なんです。ドアも窓もすべてロックされていた部屋に侵入するには、どんな方法があるでしょうか？」

沢富に見つめられたナオコは、真剣な表情で考え始めた。「外部からは、侵入できないのね。となれば、そうよ、ロックされる前に、すでに、部屋に侵入していたのよ。簡単なことじゃない」沢富と伊達は顔を見合わせた。伊達は、右手のグラスを握りしめつぶやいた。「なるほど、すでに侵入していたのか。もしそうだとしていても、何一つ手掛かりがないんじゃ、手も足も出ない。防犯カメラでもあれば、一発で解明したんだが」

沢富もその点が気になっていた。「そこなんです。そのホテルの通路には、なぜか、防犯カメラがないんです。おかしいですよ、先輩」腕組みをした伊達は、大きくうなずいた。「もしかしたら、計画的な暗殺じゃないか？日本のホテルには、防犯カメラがついている。だから、防犯カメラがついてないホテルで暗殺したと考えれば、合点がいく。しかも、大臣が宿泊するようなホテルに防犯カメラがないというのも解せない。ますます、におう。マフィアの仕業かも？」

ナオコは、ポンと手をたたき話し始めた。「あなた、今日はさえてるじゃないの。防犯カメラがないホテルってのが、怪しいわよ。タイでは、全く防犯カメラがないのかしら？」沢富が返事した。「全くないってことはないでしょ。玄関、ロビー、裏口、エレベーター、屋上、などにはあると思います。でも、通路にはなかった、ということです」

伊達は、ウ〜〜とうなって話し始めた。「これは、国際的マフィアの暗殺とみて、まず間違いない。まず、通路に防犯カメラがないタイのホテルにN大臣を宿泊させた。次に、ヒットマンをN大臣が入室する前にひそかに侵入させていた。そして、お酒でぐっすり寝込んだN大臣を確認したヒットマンは、アイスピックで左胸を突き刺した。どうだ、この推理。ということは、旅行会社も一役かってる可能性がある。組織的犯行だな」

ナオコは、赤霧島のお湯割りを作って伊達に差し出した。目を丸くしたナオコは、甲高い声を出した。「旅行会社もですか？だとしたら、国際的かつ組織的犯罪ね。こんなことするの、いったい誰かしら？」沢富は、深刻な顔をして話し始めた。「先輩が言われるように、暗殺されたのだと思います。でも、他殺の物的証拠はありません。この事件があつさり自殺として処理されたのも、警察に圧力がかったからではないでしょうか？」

パッと目を見開いたナオコは、ひらめきを話し始めた。「ホテルのドアは、自動ロックよね。ということは、侵入するには、誰かに開けてもらわないと入れないわけでしょ。ホテルのスタッフを徹底して尋問すればいいのよ。犯人に協力したスタッフがいるはずよ」呆れた顔の伊達がナオコを見つめて返事した。「お前もバカだな～～、犯人に協力しましたなんて、共犯を認めるバカがいるか」

ナオコは、自分の愚かさに気づいたのか、肩を落としてつぶやいた。「そうよね、まさに、完全犯罪ってことね」沢富が話を付け加えるかのように話し始めた。「そうです、この暗殺は、完全犯罪です。警察も手が出せない犯罪じゃないでしょうか。すでに、ヒットマンに協力したホテルのスタッフも消されたってことも？そう、同室していたM氏に何もなければいいのですが」

伊達が思い出したように話し始めた。「N大臣と同室していたM氏か。彼は、間違いなくシロと思うが、お酒を飲みかわしているときに何か重要なことを聞いていたかも。でもな～、うかつに、N大臣のことを喋れば、彼も消されてしまうんじゃないか。M氏には、そのことを教えてあげたほうがいいような気がするな。彼は、確か、糸島在住だったな」沢富もM氏のことが気になっていた。「はい、M氏は、伊都タクシーの会長です。一度、伺ってみましょうか」

消えた指紋

2月4日（日）雷山別荘のリビングで、植木は悪霊に取りつかれたようにおびえる松山を励ましていた。帰国後、松山の夢にN大臣がたびたび現れるようになっていた。また、あの日のN大臣の様子からして、決して自殺ではなく、N大臣は何者かに殺されたに違いないという思いが、頭から離れなかった。その思いが強くなればなるほど、決して国会議員にはなってはならないという思いも強くなっていた。怖気づいてしまった松山にどうか勇気を取り戻してもらおうと、植木は、毎日曜日に、別荘にやってきては松山を励ましていた。

「会長、そう深刻にならずに。あれは、自殺ですよ。何か、思い悩むことがあったに違いありません。もう、忘れましょう。会長には、植木がついているんです。必ず、日本のドンにして見せますから。勇気を出して、一緒に、頑張りましょう」松山は、この励ましを、何度も聞かされた。だが、どんなに忘れろと言われても、N大臣の顔が脳裏から消え去らなかった。

「もう、そんな気休めはやめろ。俺は、国会議員にはならん。あれは、自殺なんかじゃない。殺されたんだ。俺にはわかる。自殺しようとするものが、陽気にお酒なんか飲むか？あの時、N大臣は、日本の未来は俺にまかせとけ、と粋がっていたんだ。そんな男が、その夜に自殺なんかするか？絶対に、自殺じゃない。暗殺されたんだ。俺は、まっぴらごめんだ。国会議員の話は、もうするな」

植木は、身を乗り出して話し始めた。「会長、何度も言うようですが、人には言えない悩みつてもものがあるんです。心に闇がある人ほど、粋がるものなんです。N大臣と最後に話をされたのは、会長なのです。N大臣は、あの夜、日本の未来は会長に任せる、という遺言を残されたのです。N大臣との縁は、きっと神様のお導きだと思いますよ。あの夜、N大臣は会長を見込んで、後継者になってくれるようにと日本の未来についてお話しされたのだと思います。会長だって、このままだと、日本は崩壊すると断言されていたじゃないですか」

植木の真剣な顔に威圧された松山は、腕組みをして、苦虫を噛み潰したような表情の顔を天井に向けた。気を持ち直した松山は、N大臣の言葉を思い出しながら話し始めた。「確かに、日本は沈没する。もう、手遅れだ。54基の原発は、必ず、テロの攻撃を食らう。農業に適した日本の気候は、気象兵器で破壊されている。日本の経済水域は、オイルで汚染された。農業も漁業も壊滅だ。さらに、高額な兵器購入と多額の米国債購入で、年金原資は、空っぽになった。日本国民は、放射能に汚染され、食うものもなく、ホームレスになって、犬死するしかない。もはや、誰が総理になっても、日本を救うことはできん。植木も、そう思うだろ」

植木は、黙って耳を傾けていた。確かに、大げさな話だと思ったが、現政権のままだと、本当に日本は沈没するような気がしていた。だからといって、このまま犬死するのもしゃくだった。同じ、死ぬなら覇権主義と戦って、CIAマフィアに一泡吹かせて死にたかった。植木は、F大学時代からアメリカの諜報機関について調べていた。CIAマフィアが国防省、FBI、大統領までもコントロールし、さらに、世界中にテロやクーデターを起こしていることも調べていた。

肩を落とし蒼白になった植木は、絶望的な声で話し始めた。「会長のおっしゃる通りです。もはや、手遅れでしょう。ケネディ兄弟が暗殺されなければ、このような地獄の世界にはならなかったのです。悪いのは、すべて、マフィアに変貌したCIAです。アメリカを世界一豊かな国にするために組織されたCIAが、どうして、悪魔のようなマフィアに変貌してしまったのか。CIAがこのまま悪魔化していく限り、世界は崩壊する。この世界を救うには、CIAマフィアを破壊しなければなりません。でも・・・」

植木は政治の話をし始めるとなぜかくそまじめになる。松山はそのことが以前から不思議でならなかった。日頃は愉快で柔和な顔の植木だったが、政治の話となると豹変したかのような強面になるのだった。ところが、今日に限って植木は泣き出しそうな表情を見せた。このような弱気な植木を見たのは初めてであった。なんとなく気まずくなってしまった松山は、話を変えることにした。

「まあ、そう嘆くことはないさ。日本には神風があるじゃないか。全国には、春日神社があるだろ。春日の神様は、日本を邪馬台国の時代から守ってくださっているんだ。元寇襲来の時のように、きっと神風を起こして日本を救ってくださるさ。もっと、気楽に考えてもいいんじゃないか。いつもの強気の植木はどこに行ったんだ。そうだ、俺の厄払いも兼ねて、ナカスでパ〜とやるか」

今の植木は中洲でパ〜とやる気分ではなかったが、泡姫の色気で松山の臆病神が消え去ってくれるのなら、泡にまみれて踊るアホ〜になるのも悪くないように思えた。「そうですね。もはや、日本は呪われている。このまま、犬死するのもしゃくじゃないですか。同じ死ぬなら、泡遊びをとことんやって死にましよう。泡姫といえば、ジャーナリストの岡崎が詳しいですよ。ちょっと、聞いてみますか」

ちょっと元気が出てきた植木に松山はほっとした。「ああ、あの時の。能天気な遊び人か。それはいい。善は急げというじゃないか、早速、聞いてみてくれ」植木は、ルミ子似の泡姫を思い浮かべた時、突然、皇帝KGBツーリストの大原の股間が脳裏に浮かんだ。急激にピンクの股間がズームアップされると疑問が噴き出してきた。「そう、話は変わりますが、我々を色仕掛けで勧誘した大原というのは、N大臣暗殺に加担していたんじゃないでしょうか？まさか、大原が犯人ってことは？」

勧誘と聞いた松山も大原の色仕掛けに疑問を感じていた。今回のN大臣暗殺は、綿密に計画された策謀のように思えてならなかった。「ウ〜〜、そうか。確かに。におう。大原のメギツネめ、一杯食わせやがったな。万が一、アイスピックに俺の指紋が残っていれば、俺が疑われていたところだった」指紋を消した誰かがいると思った植木は、目を輝かせ、松山を見つめた。

今、何と言われました。指紋が残っていれば・・・」松山もはっとした。「そうだよな。そうだ。指紋がないってことが、おかしいんだ。確かに、俺は、あの時、N大臣に頼まれて、アイスピックで氷を割った。だから、俺の指紋が残っていただなければならない。なのに、俺の指紋は、全く残っていなかった。つまり、誰かが、俺の指紋をふき取ったということだ」

植木は右手のこぶしを左手のひらにパチンとぶち当てた。「指紋をふき取ったのはだれか？ヒットマン？。いや、こうも考えられます。N大臣は、会長に容疑がかからないようにと、あえて、会長の指紋が残らないようにアイスピックをきれいにふき取った。こう考えても、不自然ではないような気がします。ウ～～・・・」植木は、腕組みをして考えこんだ。そういわれると、松山もN大臣が拭き取ったような気がした。

松山は、大きくうなずき話し始めた。「確かにN大臣が俺のことを考えて、ふき取ったとも考えられなくもない。でもな～～、自殺するとき、そこまで頭が回るものだろうか？仮にだ、アイスピックに俺の指紋が残っていたとしよう。俺の指紋が残っていたからといって、俺が殺人罪に問われるだろうか？俺には、殺人動機がまったくない。冤罪になる可能性は、ないように思うが」

植木も大きくうなずき返事した。「そうですよね。会長の指紋が残っていたからといって、殺人者になるとは到底思えません。殺人動機もなければ、争った形跡もなかったのですから。ということは、うかつにも、指紋をふき取った人物こそ、N大臣殺害の犯人ということですよ。指紋のことは、警察に話されたのですか？」松山は、顔をゆっくり左右に振った。

植木は、ホツとしたような表情を見せ、松山に忠告した。「それは、よかった。私たちが推察したようにN大臣が暗殺されたのであれば、マフィアがもっとも警戒するのは、あの夜同室していた会長です。今、指紋のことを警察に訴えれば、たとえ公開されなくとも、その情報は警察内部から犯罪組織に流れるでしょう。そして、犯罪組織の打つ手は、火を見るより明らかです。会長、この指紋の件は、絶対に他言してはなりません。私も、聞かなかったことにいたします」

松山の体は、小刻みに震えていた。「まさか、俺まで暗殺されるってことはないよな。おい、植木。冗談じゃないぜ。俺は、何も知らないし、警察でも、N大臣のことについては全くなにもしゃべってない。こんなことになったのも、あの大原というメギツネのせいだ」植木も大原のことが気になっていた。セールスレディーの大原も暗殺事件に加担していたならば、きっと、会長の様子を探りにやってくるような気がした。

「会長、どうも、あの大原は気になりますね。彼女が、暗殺に加担していたという確固たる証拠はないわけですから、何とも言えませんが、なんとなく、近々、会長に接近して来るように思えます。彼女が、N大臣自殺事件のことに探りを入れてきたなら、彼女も一枚かんでいるとみて間違いないでしょう。どんなことがあっても、指紋の件だけは、黙っていてください」松山は、大原の股間を思い出すと色仕掛けにやられた自分がみじめに思えた。

忠告

2月5日（月）午後3時に、雷山の別荘で松山はN大臣自殺事件の件で二人の刑事と会う約束をした。その事件のことは、すでに警察にはすべてを話したからこれ以上話すことはないと伝えしたが、皇帝KGBゴルフ倶楽部について少し伺いたいというのでやむなく面会することにした。二人の刑事は、定刻に別荘にやってきた。松山は、何も話したくなかったが、質問を促した。

「どういうご用件でしょうか？」伊達は皇帝KGBゴルフ倶楽部の件で伺ったといった手前、まず、タイゴルフツアーについて聞くことにした。「突然、刑事二人も押しかけまして、誠に申し訳ありません。皇帝KGBゴルフ倶楽部のことなのですが、世界中の大物政財界人が会員になっていると伺っています。日本では、特に問題になっていないようなのですが、欧米では会員に不審な事故死が起きているのです。そこで、タイゴルフツアーなのですが、何か気になるようなことはありませんでしたか。何でも構いません。勧誘に際しての営業マンについても構いません」

色仕掛けの勧誘について話そうかと思ったが、そのことをきっかけにN大臣のことを根掘り葉掘り聞かれるような気がして、黙っていることにした。「そうですね。特に、トラブルったことは、一切ありませんでした。営業マンの説明通り、とても、楽しくプレーさせていただきました。二日目にA大臣とまわったときは、2アンダーで、三日目にN大臣とまわった時が、3アンダーでした。フェアウエーは広く、ラフは浅めで、グリーンもやさしめでした。距離もそれほど長くなく、シニアでも、十分楽しめる手ごろなコースでした。また、4月に行く予定にしています」話し終えた松山は、大臣の名前を出してしまったことに、ちょっとまずかったと内心想った。

伊達は、アマゴルフ界については全く知らなかった。当然、松山が日本アマに出場するほどのトップアマであることも知らなかった。アンダーパーと聞いて、目を丸くした伊達は、少しビビってしまった。「松山さんは、シングルでいらっしゃるですね。それでは、ゴルフを満喫なされたことでしょうか。私は、100も切ったことがない、ド素人です。ゴルフについて話をするのは、お恥ずかしいんですが、N大臣ともラウンドなされたのですね。ああいうことになって、誠に残念です。日本の宝をなくしたような心持です」

自らN大臣の名前を出してしまった手前、話を繋げざるを得なかった。「政治のことはわかりませんが、プレーは礼儀正しく、スコアをごまかすこともなされませんでした。確か、スコアは、97だったでしょうか。アプローチは、なかなかのものでした。かなりやられているみたいでしたね。謙虚な方で、ぜひ日本に帰っても、ご教授いただきたいといわれてました」一瞬、口が滑ったと思った松山は話をやめた。

伊達は、日本に帰っても、という言葉聞いて、ますます、暗殺説に傾いた。そして、N大臣自殺の事について尋ねれば、警察にはまだ言ってないことをポロリと話すように思えた。「97ですか、N大臣は、文武両道とは聞いていましたが、ゴルフの腕も大したものですね。松山さん、話は変わりますが、タイ警察も日本警察も、N大臣の死は、間違いなく自殺と判断しました。今回の事件は、松山さんにとって、不運な事件だったと思います。でももう、この事件は、解決いたしました。ぶしつけで、失礼とは思いますが、できれば、N大臣自殺の件は、忘れていただきたい」

松山も忘れる気でいたが、警察に念を押されるとN大臣の顔が脳裏のスクリーンにクローズアップされてしまった。ブルブルと顔を左右に振ると、すべてを忘れる決意をして、返事した。「わかりました。N大臣のことは今日限り、きっぱりと忘れます。そして、心よりご冥福をお祈りいたします」その言葉を聞いてほっとした二人の刑事は、笑顔を作った。伊達は、厚かましいと思ったが、帰る前に、ほんの少しゴルフのレッスンを願い出ることにした。

「松山さん、誠に恐縮なのですが、ちょっとでいいですから、ドスライスが出るスイングを見てもらえませんか。相方も、私と同じく、どうしようもないスイングなのです。ほんのちょっとでいいんです。シングルの方に見ていただければ、少しはよくなるんじゃないかと思っています。お願いできますか？」二人の刑事は、そろって頭を下げた。伊都ジュニアゴルフ倶楽部の顧問をしている松山は、笑顔を作ると快く引き受けた。

「そんなに、悲観なされることはありませんよ。誰しもスイングには癖があるものなのです。ほとんどの方は、スライスに悩まされるものです。私でも、最初から上手だったわけではありません。それじゃ、隣のトレーニングルームに移りましょう。さあ、どうぞ」松山は、すっと立ち上がるとリビングの東側にある部屋に向かって歩き始めた。二人は、松山の後に続いて歩き始めた。

隣の部屋には、ウェイトトレーニング器具、ランニングマシン、大型モニター、バーチャルスクリーン、グリーンネット、などのゴルフに必要とみられるトレーニング器具がそろえられていた。「それじゃ、伊達さん、こちらに立って、まず、アドレスをやってみてください」伊達は、ピンのドライバーを手渡されると、小さなグリーンマットの前に立ち、いつものアドレスをとった。松山は、いろいろと問題点を発見したが、大きな問題点から矯正することにした。

「一度にいくつも矯正されると、誰しも、スイングができなくなってしまうんです。今日は、特に大切なポイントをお教えします。まず、スタンスですが、伊達さんのスタンスは大きすぎます。しかも、かなりオープンになっています。肩幅より小さいぐらいがいいのです。それと、左手のグリップは、もう少しかぶせてください」伊達は、言われたようにスタンスを狭めて、スクエアにした。左手親指の根元をかぶせるようにグリップを少し右に回した。

松山は、次にスイングをさせた。「それでは、軽く素振りをしてみてください」伊達は、硬い体を回転させてブ〜ンと一振りした。テークバックで肩が十分に回っておらず、ダウンスイングで右肩を前に突き出していた。「ほとんどの場合、スライスするのは、右肩を前に突き出すからなのです。右肩は、前に出すのではなく、あごの下にグイッと押し込んでください。肩は、水平に回すのではなく、縦に回転させるイメージです。最初から、うまくいきませんが、何度も練習すれば、スライスは、かなり小さくなります」

松山は、沢富に顔を向けるとホンマのドライバーを手渡し、声をかけた。「沢富さんもアドレスをとってみてください」スタンスには問題なかったが、ハンドダウンとフックグリップに問題があった。「沢富さんは、もう少し頭を上げてください、そして、左グリップがかぶせすぎですから、左手を少し左に回してください。それでは、軽く素振りしてください」沢富は、左脚を上げて右にスエーして、左腰を引きながらダウンスイングした。

「テークバックの時、腰が右に動いています。左脚を上げずに肩だけを回すようにしてください。フィニッシュでは、右足に体重を乗せるのではなく、左脚に乗せてください。では、お二人のスイングをモニターで見てみましょう」壁に据えられた大型モニターに目をやると伊達のスイング姿が映し出された。「伊達さん、自分のスイングを見られてどうですか？」伊達は、目も当てられないへんてこりんなスイングを見て、啞然としてしまった。「いや、これはひどい。恥ずかしくて、見てられませんな」

つぎに沢富のスイング姿が映し出された。「沢富さんのスイングです。いかがですか？」沢富も自分のスイングを見て腰を抜かしそうになった。「何ですか、このへっぴり腰、石川プロと全然違うじゃないですか。石川プロをまねてるつもりなですがね～。練習すれば、石川プロみたいに、なれますかね～～」松山は、大声でワハハ～～と笑ってしまった。「プロみたいには、そう簡単になれませんよ。シングルの私でも、石川プロとは、程遠いんです。とにかく、根気よく練習してみてください。時々、私がチェックしてあげますから」

伊達は、あまりにも醜いスイングを見せられ、クラブを見ると恨めしくなった。ゴルフなんかくそくらくと内心想ったが、とにかく、レッスンをしてもらったお礼を言って帰ることにした。「松山さんにレッスンしていただいて、練習意欲がわいてきました。しっかり、練習して、100を切れるように頑張ります。ぜひ、また、レッスンお願いします」伊達は、心にもないことを言って、沢富に振り向き目配せした。

「いや、まったく、こんなド素人の我々にレッスンしていただき、ありがとうございます。必ず、100を切って見せます。そうだ、もし、100が切れたら、ラウンドレッスンしていただけますか？」ニコツと笑顔を作った松山は、うなずいて返事した。「はい、ご一緒いたしましょう。向上心の強いお二人だったら、きっと100は切れます。頑張ってください」松山は二人を駐車場まで見送った。

駐車場には、ベンツS550の横に沢富のかわいいブルーのクロスビーが並んでいた。松山はクロスビーを左右交互に眺めてから話し始めた。「新発売のクロスビーですね。息子の嫁さんがスズキファンでして、ピンクのラパンからオレンジツートンのクロスビーに乗り換えたんですよ。スズキはかわいいのを作りますね。沢富さんもスズキファンなんですよ」ニコツと笑顔を作り頭を掻きながら答えた。「はい、ダチがスズキのメーカーにいまして、彼に勧められて乗るようになったんです。とにかく、かわいいですよ。僕もかわいいのが好きなんです」クロスビーに乗り込んだ二人は、松山に会釈すると下り坂をゆっくり進んだ。

口止め

2月10日（土）午後2時に皇帝KGBジャパンツーリストの大原がやってきた。用件は、タイゴルフツアーで迷惑をかけた謝罪ということだったが、二人は、やはり来たかと大原の探りに警戒した。松山は、正面に腰掛けた大原のミニスカートから伸びた白い脚を見つめにやけた顔であいさつした。「お詫びなんて、N大臣の件は、別に気にしていません。思いもかけず、降りかかってくる災難は、誰しもあることですから」

大原はなんとなくよそよそしい態度から二人がN大臣自殺事件に関して何か隠していると感じ取っていた。「いえ、松山様には、大変ご迷惑をおかけしました。何らかの形でお詫び申し上げたいと思いながら、謝罪が遅れまして申し訳ありません。お二人にいかような形でお詫び申し上げようかと本社に問い合わせたところ、皇帝KGBナカスホテルでのディナーショーに招待してはどうかとのことで、早速そのご案内に参りました。

わざわざ糸島までやってきて、謝罪として二人をディナーショーに招待するとは、あまりにも不自然だと松山は思った。二人は、お互いの顔を見合わせて、小さくうなずいた。「大原さん、そのようなことは結構です。先ほども言いましたように、別に気にしてはいません。タイゴルフツアーは、とても楽しませていただきました。4月になったらまた、ツアーに参加したいと思っています。その時は、よろしく願います」

笑顔を作った大原は長い脚をゆっくり組みかえ、松山の視線を引き付けた。股間に目のない植木は一瞬のぞき込んでしまった。「松山様、こちらの気持ちですから、軽い気持ちで、お越しく
ださいませんか。そのディナーショーでは、ロシアで有名なベリーダンサーたちが参ります。日
本では、見るできない美人ぞろいなんですよ。いかがですか。ロシア人のコンパニオンも
お付けいたしますので、心行くまでお遊びくださって結構です」

二人は、顔を見合わせて、首をかしげた。「コンパニオンまでつくディナーショーとは、贅沢
ですね。私たちのほかに、どのような方がいらっしゃるのですか？」大原は、ちょっとためらう
ようなしぐさを見せたが、笑顔で返事した。「ここだけの話にしてください。今回のディナ
ーショーは、ロシア皇帝KGBバンクの幹部役員の接待なのです。松山様も植木様も大切なお客様で
すので、ご招待するようにとの本社からの指示なのです。

二人は目を丸くして顔を見合わせた。透き通るシルクのショーツが目突き刺さり勃起して
しまった植木が、股間を抑えて興奮しながら尋ねた。「福岡に、
かの有名なロシア皇帝KGBバンクの幹部役員がいらっしゃるんですか。ということは、福岡で何ら
かのプロジェクトが進められているということですね。もしかして、今話題のカジノですか？」
大原にとって、いつも能天気な植木が、即座にプロジェクトを察するとは意外であった。大原は
目を丸くして答えた。「さすが、植木様。極秘にしてくださいね。私もはっきりしたことは知ら
ないのですが、上司の話では、カジノではないかと」

植木は、ジャーナリストの岡崎からカジノの情報を得ていた。CIAマフィアがカジノ建設地とし
て大阪を予定していると聞いていたが、まさか、ロシア皇帝KGBバンクまでが水面下で動いている
とは、意外だった。植木は、幹部役員とやらの風貌を見たくなった。植木の目はギラギラと輝き
始めた。カジノの話は植木の好奇心を刺激してしまった、と思った松山は、これ以上好奇心を刺
激しないようにと話しに割り込んだ。「それはそれは、結構なおもてなしには恐縮いたします。
でも、我々、平民がこのこと出向くディナーショーではありません。お気持ちだけ、頂戴いた
します」

大原は植木の好奇心を利用してディナーショーに招待する作戦に切り替えた。植木に笑顔を向けると情報を投げかけた。「本当に、ここだけの話ですよ。今回の招待客は、世界的大物ぞろいなんです。かれらのほかに、サウジやクエートの王族たち、さらに、東京から数人の国会議員もやってくるということです。そのために、夜のコンパニオンも。ということは、かなり大きなプロジェクトじゃないでしょうか？」

松山は、ますます大原がうさん臭く感じられた。このような極秘情報はどんなことがっても他言できないはず。もしかすると、ディナーショーには、マフィアが紛れ込んでいるのではないかと思えた。だとすると、我々の顔をヒットマンに見せるのが、招待の目的ではないか？身震いが起きた松山が、改めて招待を断る返事をしようとしたとき、真剣な表情の植木が口をはさんだ。

「会長、わざわざ、糸島までお越しいただいたのですから、今回の件は、考えさせてもらったらどうでしょう。その返事は、いつまでにすればいいのですか？」植木は、松山に振り向いた。松山は、ここではっきりと断るべきだと思ったが、大原の好意も配慮して日を置いて断ることにした。「そうですね、それじゃ、少し考えさせてください。二人で、相談したうえで、ご返事いたします」

大原は、この場で返事をもらいたかったが、きっとこの招待に乗ってくると判断した大原は、笑顔で返事した。「さようございますか、ディナーショーは2月25日、日曜日に予定していますので、2月17日、土曜日までにご返事いただけますか」大原は、ゆっくりと股間がのぞけるように脚を組み替え、二人に笑顔を見せた。植木は身を乗り出してあからさまに覗き込んだが、松山は、大原の色仕掛けに警戒を示した。

植木は、頭の中で密かに今後の作戦を練っていた。国会議員と皇帝KGBバンク役員との秘談をネタに国会議員を利用できるかもしれない。もしかすると、メインバンクをめぐる談合なのかもしれない。いや、建設予定地か？今のところ、大阪に予定されているが、九州では、長崎、宮崎も候補地にあがっていたはず。建設予定地に関しては、不動産会社がかかわるわけだ。不動産会社といえば、九州ではトップの華丸不動産も動くはず。

岡崎は、カジノの件にかなり詳しくあったが、もしかしたら、華丸不動産専務である父親に依頼されて、カジノ建設予定地を探っていたのかもしれない。いつものごとく、買収して、地上げをするつもりだな。そうか、ジャーナリストというのはカバーで、華丸不動産のスパイってわけだな。どおりで、金回りがいいはずだ。植木は、ディナーショー招待の話の餌に、取引をしてみることにした。政界とつながりの深い華丸不動産を味方につければ、会長の政界進出は夢でないように思えてきた。

取引

早速、2月11日（日）、午後8時に、植木は中洲のクラブミニスカで岡崎と会う約束をした。植木は約束時刻の10分前に到着した。予約を確認したボーイは、左奥のテーブルに案内した。テーブルに着くとまだ14、5歳と思われるような浅黒い少女が右横に腰掛けた。この店には、未成年者と思われる少女がたくさんいる。本当に未成年であれば、風俗営業法違反に当たると思ったが、年齢を確かめる気にはならなかった。

「オジサン、アタシー、ミク。ヨロピク。ミズワリデ、イ〜？」ぎこちない日本語が耳に入った。植木は、一瞬身を引いた。色白もいれば浅黒いのもいる。この子たちは、日本人じゃない。不法入国のタイ人、ベトナム人、フィリピン人たちじゃないだろうか？やはり、ここはヤバイ店かもしれない。引きつった顔で「ハイ」と返事するとあどけない少女はカウンターに走っていった。

テーブルについて20分ほどすると両脇に少女を抱きしめた岡崎が、笑い声をあげながらテーブルにやってきた。ソファーに腰掛けると早速大きな目をギョロギョロさせて口火を切った。「折り入って、話とは？」植木は少女たちに話を聞かれるようで話しにくくなってしまった。「いや、ちょっと、ほら、N大臣の。でも、この子たちに聞かれるとまずいような」岡崎は、かぶりを振ってこたえた。

「心配いらん、この子たちは、あいさつ程度しか、日本語はわからん。N大臣のことで、まだ取り調べがあるとね。ポリちゃんも、しつこかね〜」少女たちのことが気になった植木は、N大臣の話は後回しにすることにした。「そっちの件は、まあ〜、今日は、カジノのことを聞きたくて」岡崎は、カジノと聞いて、真剣な表情を作った。「カジノといたしますと？」植木は、右横の小顔少女をちらっと覗き見ると話し始めた。

「ほら、この前言っていたでしょ。第一号カジノは大阪が濃厚だと。福岡はどうなのかと思って」岡崎は、一つうなずいて答えた。「今のところ、第一号は大阪でしょ。第二号は、混戦ですな。関東では、東京、神奈川、千葉、九州では、長崎、宮崎、などの候補地が上がっています。そう、北九州に作りたいという議員もいますしね〜。何とも言えませんな」やはりそうかと思った植木は、うなずき、話を続けた。「ここだけの話ですよ。本当にこの子たちは大丈夫でしょうね」岡崎は、マジな顔つきで答えた。「気にせんでよか〜〜」

身を乗り出した植木は、小さな声で話し始めた。「国会議員が招待されているディナーショーに、会長と私も招待されたんです」国会議員と聞いた岡崎は、口元に運んでいたグラスをピタッと止めた。グラスをテーブルに置くとジャーナリストの表情を見せた。「その話は、ここではまずい。場所を変えましょう」岡崎は、立ち上がるとカウンターに向かった。ママと話し終えて戻ってきた岡崎は、「出ましょう」と声をかけてドアに向かった。

二人は、六本松にある岡崎のマンションに向かった。岡崎は、一人住まいにもかかわらず、3LDKの高級マンションで優雅に暮らしていた。植木は、あまりの豪華さに目を丸くしてしまった。リビングに案内されると、岡崎はサイドボードからグラスとマッカランを取り出してきた。それをテーブルに置くとフリッジから氷と水を運んできた。「ここだったら、盗聴されることもない。早速、例の話をお聞きしましょう」

岡崎は、水割りを二つ作り、一つを植木に差し出した。植木は、なんとなく緊張していた。ディナーショー招待の話は、N大臣暗殺の口封じのようで、他言することに慎重になっていた。「先日、タイツアーに勧誘したセールスレディーの大原がやってきましてね、タイツアーでは大変ご迷惑をおかけしました、と言って、お詫びにとディナーショーに我々を招待したんです。でも、会長は、この話は不自然だから断ると言ってるんですが、やはり、断るべきでしょうか、ジャーナリストでいらっしゃる岡崎さんのご意見を伺いたくて」

グラスを傾けカランとグラスを響かせ、岡崎は首をかしげた。「ほ～、ディナーショーにですか。先程、国会議員のことを言われてましたね」植木は、一口水割りを流し込み、一息おいて返事した。「そう。それがですね、そのディナーショーというのは、ロシア皇帝KGBバンク幹部役員と国会議員たちへの接待らしいのです。そこに我々も招待するというのです。どう思われますか？」岡崎は、腕組みをして考えをまとめているような顔つきで、うなづいた。

何かひらめいたような顔つきになると話し始めた。「なぜ、植木さんたちをディナーショーに招待したか？そこですね。確かに、会長がおっしゃるように不自然です。万が一、N大臣が暗殺されていたとするならば、犯罪組織の監視とも考えられます。でも、彼らの手に乗ってみるのもわるくない」植木は、腑に落ちなかった。「それじゃ、ディナーショーに招待されてみてはどうかと」

岡崎は、グイッとウイスキーを飲み込むと眉間にしわを寄せ話し始めた。「N大臣のことですが、私は、暗殺と確信しています。自殺の動機が、全くないわけですから。おそらく、マフィアによる暗殺でしょう。そう考えると、ここで招待を断れば、ますます、お二人を警戒すると思われまます。むしろ、素直に招待されたほうが、相手方は警戒を緩めるように思われます。それと・・・」

植木も岡崎の考えに同感だった。「それと、何か？」岡崎は、国会議員のことが気になっていた。「ロシア皇帝KGBバンクの役員と国会議員の密談が、気になるのです。国会議員が絡んでいとなれば、水面下で大きなプロジェクトが推し進められていると考えてもおかしくありません。もしかすると、カジノかも？」植木はカジノと聞いて身を乗り出した。「やはり、カジノですかね」

岡崎は、東京まで出かけジャーナリストの仲間からカジノに関する情報をとっていた。もしかしたら、N大臣の暗殺は、カジノの件が絡んでいるのではないかとふと思った。カジノ運営には、日本の暴力団だけでなく、国際的ないろんなマフィアが絡んでくると考えられる。利権が絡み、マフィアの抗争は避けられない。いったん、カジノが運営されれば、付随して麻薬の売買、不法入国者の売春、議員とマフィア間の贈収賄、など日本警察でも手が出せないような国際的な犯罪が勃発する。

岡崎は「虎穴（こけつ）にいらずんば、虎兇（こじ）を得ず」とつぶやき、話し始めた。「植木さん、彼らの手に乗って、ディナーショーに招待されてみてはいかがでしょうか。もしかすれば、国会議員連中についたコンパニオンたちから、カジノ予定地についての情報を得られるかもしれません。どうです？」植木は、地雷が埋め込まれた危険地域に一歩足を踏み入れるような恐怖を覚えたが、会長を国会議員にするために一か八かの賭けに出ることにした。

「虎穴にいらずんば、虎兇を得ず、ですね。もし、カジノ予定地に関する情報が入りましたら、いの一番に、岡崎さんにお知らせします。でも、私も命がけです。その代わりというのかもしれませんが、会長の政界進出にご協力いただけませんか」岡崎は、カジノ予定地の情報が喉から手が出るほど欲しかった。しかし、名もないジャーナリストでは、選挙に関しては力不足と思った。「協力といいましても、選挙に関してド素人の私には、投票を左右するほどの力はありませんからね～」

ニコツと笑顔を作った植木は、部屋をグルっと見渡した。そして、高級テーブルを右手でさすりながら上目遣いで話し始めた。「いやいや、ジャーナリストで、この高級マンション。かなり、方々に力がおありと見えますが。特に、華丸不動産には」岡崎の顔が固まった。「いや、まあ、このマンションは、おやじの名義でして。ちょっと、使わせてもらってるだけですよ」目を丸くした岡崎は、震える手でグラスを口元に運んだ。うろたえた岡崎を見て、追い打ちをかけた。

「岡崎さんは、カジノ予定地の情報が欲しいんじゃないですか？華丸不動産のために。岡崎さん、お願いします。華丸不動産に渡りをつけてほしいのです。華丸不動産なら、福岡の票を動かすことができます。ぜひ、お力をお貸してください。この通り」植木は、フロアに正座すると土下座をしてお願いした。困り果てた岡崎は、弁解がましく話し始めた。「ジャーナリストとして、カジノ予定地の情報は、確かに欲しいのです。でも、政治にかかわりたくないのです。選挙の件は、勘弁してください」

茫然自失となった植木は、さみしそうな声で話し始めた。「そうですか。だめですか。頼みの綱が切れてしまっは、会長に会わせる顔がありません。死んでお詫びを・・・」跳び上がった岡崎は、悲壮な顔で正座している植木に声をかけた。「植木先輩、そう、悲観なされずに、今日は楽しく飲み明かしましょう。さあ」椅子に腰掛けた植木は、グラスを勧められたが、ガクンとうなだれて今にも泣きだしそうな表情を作った。

岡崎は、父親に政治にはかかわるなど強く念を押されていたが、植木の悲しそうな表情を見るとやるせなくなってしまう。この際、ほんの少しだけ協力することにした。「先輩、それじゃ、ほんの少し、協力いたしましょう。でも、あてにはならないですよ。私は、選挙に関しては、ド素人なんですから。いいですか」目の前がパッと明るくなった植木は、大声で感謝の言葉を述べた。「ありがとう。華丸不動産がバックにつけば、当選したも同然。本当にありがとう」

あまりの喜びように困惑した岡崎は、後でがっかりさせては申し訳ないと思い、念を押した。「先輩、喜ぶのは、早すぎます。選挙というのは、権力争いなんです。お金も絡んでくるし、とにかく、厄介なんです。あまり、当てにしないでください」植木の喜びは、止まらなかった。「何をおっしゃいます。専務のお父様は、天下の笹川家とも親しくなされているとか。鬼に金棒とは、このことじゃないですか」

岡崎は、植木がここまで能天気だとは思わなかった。いったん、協力するといった手前、専務の父親だけでなく、医師会に影響力のある吉岡にも協力を依頼せざるを得ないように思えた。あまりの嬉しさに、植木は、足をヒョイヒョイと持ち上げながら、やすき節を踊り始めていた。岡崎は、植木の能天気さにあきれていたが、突然、胸騒ぎがすると、震えが起きた。その時、ドジョウすくいポーズをとりながら踊るアホ～のすぐ後ろまで、デビルが影が迫っていた。